

インドネシアの音楽カリキュラムに見る文化のグローバル化

石井 由理

Cultural Globalization as Reflected in the National Curriculum for Music in Indonesia

ISHII Yuri

(Received December 14, 2023)

キーワード：グローバル化、学校音楽教育、インドネシア

はじめに

グローバル化現象に対する一般社会の認識が高まったのは、情報通信技術の発達が加速した1990年代である。しかしギデンス (Giddens, 1990) が述べるように、グローバル化とは近代化が進行した結果であるとするならば、アジアにおいてはヨーロッパの国々が進出して植民地を築き始めた頃に、既にグローバル化は始まっていたことになる。19世紀にヨーロッパ近代はアジアを含む世界各地へと広まっていったが、非ヨーロッパ社会がそれをどのように受け入れていったかは一律ではない。受け入れる側が独立国であり、何をどのように受け入れるかを自分で選択できたかどうか、植民地の宗主国が現地でどのような文化政策を取ったか、植民地がいつ独立したかなどによって、様々に異なる。

音楽文化に関していえば、日本は19世紀末に西洋の芸術音楽を積極的に取り入れ、西洋芸術音楽の専門家を養成したほか、学校教育をとおして国民全体の音楽文化を近代化しようとした。現在の日本社会において西洋クラシック音楽のコンサートがごく一般的に催され、多くの子どもたちがピアノを習っているように、その「近代化」政策の成果は顕著に表れている。20世紀初めに日本モデルの音楽教育を取り入れた中国や、現地の近代化の初期に日本によって統治された韓国や台湾の音楽文化においても、西洋の芸術音楽の存在は大きい。また、シンガポールでも英国植民地時代からコンセルヴァトワールを設立し、さらに英国留学をさせるなどして西洋芸術音楽を取り入れ、専門家の養成を行ってきた (石井, 2017)。他方、タイのように1930年代になるまで自国の宮廷古典音楽を優遇し、西洋芸術音楽の専門家の養成や大衆の音楽教育には無関心であった国もある。その結果、タイでは、東アジア社会に比べて西洋芸術音楽の影響は小さく、大衆が自由に取り入れた西洋の大衆商業音楽の影響が大きい。

本稿が取り上げるインドネシアも、西洋芸術音楽の影響が小さい国である。その理由として、そもそもオランダ植民地時代に入って来た西洋音楽が本格的な芸術音楽ではなく、気楽に聞ける大衆音楽であったこと (McGrow, 2013, 28)、1920年頃から作られたインドネシア人作曲家による愛国歌の音楽が、西洋の芸術音楽ではなく大衆商業音楽の範疇に属する性質のものであったことがある (Mack, 2007)。近代国家としての独立を願って作られた愛国歌は、歌詞こそ愛国的な内容であったが、音楽そのものは西洋の音楽であり、それは西洋音楽文化の全体像を理解することなく、そのほんの一部、西洋では文化としては軽視されがちな商業音楽を模倣したものであったということである (Mack, 2007)。このように、インドネシアは近代化のプロセスの中で日本とは異なる西洋音楽文化を取り入れ、さらに、独立後に学校での音楽教育をとおして国民形成をしようという国をあげてのプロジェクトも存在しなかった。1990年代にグローバル化が加速した時の日本とインドネシアの音楽文化における西洋の影響には、このような違いがあったのである。

この違いの前提のもと、本稿では、グローバルスタンダードへの収斂とローカル文化の自己主張の活発化の両面をもつと言われる文化のグローバル化が、インドネシアの学校音楽教育にどのような変化をもたらしているのかを、2013年のナショナルカリキュラムとそれに基づく政府編集の教科書を中心に考察していく。

1. 2013年カリキュラムまでの経緯

インドネシアの公立学校では長い間、音楽教育は学校教育の正規課程で教えるべきものとして真剣に取り組みられてはこなかった。Mack (2007) によれば、独立後の20年間は、音楽教育といえば、先述のように独立前後に西洋の大衆商業音楽の影響を受けて書かれた愛国的な歌を歌うものでしかなく、1984年のナショナルカリキュラムによって1週間に45分2コマの音楽教育が小学校、中学校、高等学校に設けられたのちも、実際には音楽は教えられるか、前述の愛国歌を歌うか、西洋音楽理論の用語をひたすら覚えるかであったという。さらに1994年のナショナルカリキュラムでは、科学技術を重視する新教育大臣の方針によって、美術やダンスも含んだ芸術教育全体で週に2コマに時間が削減された。音楽教育で愛国歌を教えるという規定はなかったが、実際には公立校の音楽教育での中心をなしていたのは愛国歌の歌唱であった (Mack, 2007)。

インドネシア語の普及をはじめとする国民統合に力を入れたスハルト政権が倒れた後、2004年に行われたナショナルカリキュラム改訂では、コンピテンシーに基づくカリキュラム、2006年に行われた改訂では学校基盤のカリキュラムが導入されている。しかし Puad & Ashton (2022) によれば、2006年カリキュラムに対しては、認知面を重視するあまりに人格形成の面での教育が損なわれ、社会における道德の低下が起きたというのが一般民衆の捉え方であった。このため、2013年のナショナルカリキュラムでは、道德性の涵養を強化するために、4つのコア・コンピテンシー (精神的態度、社会的態度、知識、スキル) のうちの精神的態度と社会的態度の二つに関しては、授業で教えるのは宗教と公民の領域の教科であるが、評価は全ての教科で行われることになった。また、インドネシア社会では道德の低下はグローバル化による西洋の価値観の流入にあると考えられており、現大統領ジョコ・ウィドドは、外国文化の影響を選択できるようなインドネシア国民の人格形成を、教育によって行わなくてはならないとしている (Puad & Ashton, 2022)。このため、2013年カリキュラムの重要な目的の一つは、インドネシアの文化の復活と強化であった (Parker & Nilan, 2013, Puad & Ashton, 2022, 525 で引用)。

前述のように、文化のグローバル化現象には、グローバルスタンダードと言われる普遍性をもつ支配的文化への収斂と、それに対する各地の独自のローカル文化の自己主張という両面があり、現政権による西洋的な価値観に対する道德性涵養のためのインドネシア文化の復活と強化は、後者の一例であるといえる。しかし、その一方で、これまで学校の音楽教育の中で愛国心や道德を教えてきたのは、歌詞の内容は愛国的であっても音楽という点においては西洋大衆商業音楽に属する曲であり、これらを歌うだけでは必ずしもインドネシア文化の復活とは言えない。2013年の音楽カリキュラムでは、どのように西洋音楽の普遍性とバランスを取りつつ、インドネシア文化の強化と道德性の涵養を試みているのであろうか。

2. ナショナルカリキュラムに示された音楽分野のコンピテンシー

筆者は前期中等教育の音楽のナショナルカリキュラムについては他所で論じているため (福田・石井, 2023)、本論文では、後期中等教育のナショナルカリキュラムに焦点を当て、そこに示されている音楽教育のコンピテンシーについて、10～12学年の学年ごとに考察していく。音楽は美術、舞踊、舞台芸術といった他の芸術分野とともに、「Seni Budaya (芸術)」という教科にまとめられており、コンピテンシーも、芸術全体のコア・コンピテンシーと、音楽独自のベーシック・コンピテンシーに分かれている。4つあるコア・コンピテンシーのうち最初の2つは、「精神的態度」と「社会的態度」で、ナショナルカリキュラム全体をとおして共通である。「精神的態度」のコンピテンシーは、学習者が自分の宗教の教えを生き、実践することである。「社会的態度」のコンピテンシーは、誠実、規律正しさ、責任感、他者への気遣い、礼儀、相手に対応すること、積極性を示し、社会的自然的環境の中で様々な問題解決に向けての態度を示し、自分自身を自分が属する国民を反映するものとして位置づけることである。これらの態度に関するコンピテンシーは、様々な形の学びをとおして身につけられるものとされている。この後に、音楽の知識とスキルのコンピテンシーが、以下の表1～表3のようにまとめられている。

表1 10学年の芸術科のコア・コンピテンシーと音楽科のベーシック・コンピテンシー

コア・コンピテンシー3 知識	コア・コンピテンシー4 スキル
3. 学習者の問題解決の能力と関心に基づいて特定分野の学びに手続き的知識を応用するとともに、学習者の科学、技術、芸術、文化、そして人文に関する興味によって、人間性、ナショナルイティ、地位、文明に由来する現象や出来事の原因についての洞察をもって、事実、概念、手続きに関する知識を理解し、応用し、分析する	4. 学習者自身が学校で学んだことの発展に関連する具体的抽象的領域において、加工し、理由付けし、発表し、科学的ルールに基づいた方法を用いることができる
ベーシック・コンピテンシー	ベーシック・コンピテンシー
3.1 伝統音楽の道具の種類と機能を理解する	4.1 伝統的な楽器を演奏する
3.2 伝統楽器をその種類とそれが生まれたコミュニティにおける機能によって分析する	4.2 伝統楽器をその種類とそれが生まれたコミュニティにおける機能によって分析した結果を発表する
3.3 伝統音楽の演奏を理解し、鑑賞する	4.3 伝統音楽を演奏する
3.4 伝統音楽の演奏の概念、形式、種類を理解する	4.4 伝統音楽の演奏の分析結果を書く

出典：KI dan KD Seni Budaya SMA MA Kurikulum 2013 Tahun Pelajaran 2021/2022 (筆者翻訳)

表2 第11学年の芸術科のコア・コンピテンシーと音楽科のベーシック・コンピテンシー

コア・コンピテンシー3 知識	コア・コンピテンシー4 スキル
3. 学習者の問題解決の能力と関心に基づいて特定分野の学びに手続き的知識を応用するとともに、学習者の科学、技術、芸術、文化、そして人文に関する興味によって、人間性、ナショナルイティ、地位、文明に由来する現象や出来事の原因についての洞察をもって、事実、概念、手続き、メタ認知に関する知識を理解し、応用し、分析する	4. 学習者自身が学校で学んだことの発展に関連する具体的抽象的領域において、加工し、理由付けし、発表し、効果的創造的に行動し、科学的ルールに基づいた方法を用いることができる
ベーシック・コンピテンシー	ベーシック・コンピテンシー
3.1 西洋音楽の概念を理解する	4.1 西洋楽器を演奏する
3.2 西洋音楽を分析する	4.2 西洋音楽の分析結果を発表する
3.3 西洋音楽のショーの結果を分析する	4.3 西洋音楽について書く
3.4 西洋音楽の発展について理解する	4.4 西洋音楽演奏と複数の歌の演奏をする

出典：KI dan KD Seni Budaya SMA MA Kurikulum 2013 Tahun Pelajaran 2021/2022 (筆者翻訳)

表3 12学年の芸術科のコア・コンピテンシーと音楽科のベーシック・コンピテンシー

コア・コンピテンシー3 知識	コア・コンピテンシー4 スキル
3. 学習者の問題解決の能力と関心に基づいて特定分野の学びに手続き的知識を応用するとともに、学習者の科学、技術、芸術、文化、そして人文に関する興味によって、人間性、ナショナルイティ、地位、文明に由来する現象や出来事の原因についての洞察をもって、事実、概念、手続き、メタ認知に関する知識を理解し、応用し、分析し、評価する	4. 学習者自身が学校で学んだことの発展に関連する具体的抽象的領域において、加工し、理由付けし、発表し、創造し、効果的創造的に行動し、科学的ルールに基づいた方法を用いることができる

ベーシック・コンピテンシー	ベーシック・コンピテンシー
3.1 現代の音楽を作る概念とテクニックを理解する	4.1 現代の音楽を作る概念とテクニックを発表する
3.2 現代の音楽作品を分析する	4.2 現代の音楽作品の分析の結果を発表する
3.3 現代の音楽の演奏を評価する	4.3 現代の音楽を作る概念とテクニックを応用する

出典：KI dan KD Seni Budaya SMA MA Kurikulum 2013 Tahun Pelajaran 2021/2022 (筆者翻訳)

上記のように、後期中等教育レベルでの音楽のコンピテンシーは、10年生が伝統音楽、11年生が西洋音楽、12年生が現代の音楽を集中的に扱っており、インドネシアの音楽文化の独自性と西洋音楽のもつ普遍的な音楽理論の双方を1学年ずつバランスよく学び、そのうえでそれらの上に成り立っている現代の音楽を学ぶ構成となっている。また、それぞれの音楽に関して、学んだ知識についての分析と音楽演奏に関しての分析をし、その結果を書いたり発表したりする活動が含まれており、そのスキルがベーシック・コンピテンシーが意味するところのスキルの大きな部分を占めているのが特徴である。

次節では、これらのコンピテンシーに基づいて政府が編集した音楽の教科書の内容を見ていくこととする。

3. 教科書の内容

教科書は芸術教科全体の教科書で、2017年の修正カリキュラムに基づいて2018年に出版されたものである (Zakarias S. Soeteja et al., 2018a; 2018b; Sem Cornelyos Bangun et al., 2018a; 2018b; Agus Budiman et al., 2018a; 2018b)。後期中等教育レベルでは、1学期と2学期の分冊となっており、音楽には各学期につき2課分が割り当てられている。各課の冒頭には、その課で学ぶことの構成が図示されており、続いてその課で身につけることが9～20項目列記されている。しかし、第11学年の西洋音楽に関してはこの項目は顕著に少なく、各課3項目から5項目となっており、身につけることの後に、学習方法として1. 観察、2. 問い、3. 連想、4. 創造的作業(2学期第9課にはこの項目はない)、5. 話し合いが挙げられている。各課の内容の後には、まとめ、振り返り、コンピテンシーの評価がある。

以下、構成図に書かれた各課で学ぶことと、身につけることの項目、教育内容の概要を述べる。

第10学年1学期 第3課 「伝統音楽」

伝統音楽の定義、音楽的象徴と美的価値観、音楽の種類、楽器の機能

身につけることが期待される項目は18項目あるが、その多くは実際に音楽を聴いたり歌ったり演奏したりすることではなく、社会や地域における音楽や伝統音楽の定義を見つけて討議したり、伝統音楽のもつ多様性や美的価値観、音楽的および非音楽的象徴や楽器を見つけ、それが存在している地域の美的価値観や伝統音楽の演奏を比較したり話し合ったりする活動がほとんどである。最後の3項目にのみ、楽曲を聞いたり、打楽器を演奏したりする活動が書かれている。

内容を見ると、ほとんどがことばによる説明である。多様な音楽の大切さとその道徳的な意義が述べられており、それらは宗教儀式や地域の価値観とも深い関係があるとしている。これらが構成図にある「音楽的象徴と美的価値観」にあたる記述である。

第10学年1学期 第4課 「伝統音楽ショー」

演奏の基本的概念、音楽的探求、音楽劇中の動作、音楽劇中の協働

身につけることが期待される項目は15項目ある。第3課よりは、「演奏してみる」「発せられた音を比較する」「他のグループが演奏したリズムを批評する」「芸術の3分野を音楽劇で統合してみる」という表現が増え、実際に生徒が音を出したり聞いたりする活動が多くみられる一方、項目の半数は音楽演奏や音楽劇に関する知識を「見つける」「記述する」「分析する」という内容になっている。

内容を見ると、音楽と他の芸術分野の協働パフォーマンスの目的は、生徒の地元文化に対する尊重の気持ちを高めるとしており、パフォーマンスの写真を見て討議する活動がある。「基本的概念」の学習はほぼ全

て解説と写真についての生徒による討議である。「音楽的探求」では、西ジャワの学校で行われた長さの異なる竹を叩いて比べる活動を紹介し、リズム譜を見て教師のまねをして叩く活動がある。「音楽劇中の動作」では、東チモールと中央ジャワの歌を聴き、楽譜を見てこれらのリズムのパターンを合奏し、音の強さを変えた時の自分の動きの変化に対する気づきを書く。「音楽劇中の協働」では、劇場でのパフォーマンスにおける身体の動きや仮面と劇のテーマとの関連性、衣装に現れた価値観などに関する討議を行う。

第10学年2学期 第11課 「音楽劇」

音楽劇の概念、音楽の様式と種類、劇、音楽劇の手続き、音楽劇の楽器

この課で身につけることの項目は15項目ある。課全体で、音楽劇に関する知識の獲得から音楽劇の上演に向けた準備のプロセス、そして最終項目で総合芸術として音楽演奏を試してみることが挙げられている。準備のプロセスは演奏自体の練習プロセスではなく、テーマの設定、選んだ音楽に沿ったダンスの動きの説明、物語の場面と音楽の関連付け、演奏者の舞台上の立ち位置、衣装、背景、プログラム作成、音楽ショー委員会の役割分担などとなっており、ショーのプロデューサーや舞台監督の仕事内容に近い。

内容を見ても、上記のプロセスを詳細に述べており、大道具小道具を決めるのは2か月前までにとか、ポスターやプログラムの作成、チケットの値段設定、企画委員会の設置など、非常に具体的である一方、実際に演奏をすることについては、テーマに沿って音楽、歌、楽器を選び、練習スケジュールを決めて練習するという記述にとどまっている。

第10学年2学期 第12課 「音楽批評」

音楽批評の定義、音楽批評の種類、音楽批評のステップと執筆、音楽批評について話し合う

この課で身につけることは12項目あるが、生徒たちが実際に演奏する項目はない。前半6項目で音楽批評とは何かについて段階を追って知識として学んでいったのち、後半で既存の批評を考察する作業が入る。第10項目では、音楽パフォーマンスを評価し、第11項目でこれまでに学んだ知識に基づいて口頭で音楽批評を行い、第12項目で音楽批評とは何かをレポート形式で説明することを求めている。

内容は、コンテストなどの審査員のコメントを聞いてその内容を表にまとめる活動や、批評の4つのタイプ（ジャーナリスティック、教育的、科学的、大衆的）について調べて定義を書く活動、フェルドマンによる批評の4段階について学んだ後に、地域で催されたコンサートを聴き、フェルドマンの4段階を使って自分の批評を書いてみる、となっている。

第11学年1学期 第8課 「西洋音楽の概念を理解する」

西洋音楽の概念：音楽の定義（モーダル音楽、調性音楽、無調音楽）

音楽の要素（音色、強弱、速度）

身につけることは、「音楽芸術の意義を説明する」「音楽の要素がわかる」「音色、強弱、速度の意味を説明する」「数字符と音符の楽譜を読み、書く」の4項目である。

内容は、冒頭に「エーデルワイス」と「イマジン」の楽譜があり、楽器による演奏の指示がある。他はほとんど知識の解説であるが、西洋音楽の概念と定義のところで、古代から中世に至るまで、音楽が神を敬うためのものだったことが強調されている。続いて西洋音楽の分析として上記の音楽の要素を示したのち、音楽理論と記号の説明が詳細になされ、最後に西洋音楽とインドネシア音楽の違いについて発表する。

第11学年1学期 第9課 「西洋音楽演奏」

西洋音楽の概念：西洋音楽ショー（声楽、器楽、混合）

西洋音楽の発展

身につけることは、「西洋音楽の演奏を分析する」「西洋音楽の演奏の種類がわかる」「西洋音楽の発展の歴史を説明する」の3項目であり、これらを前述のように「観察」「問い」「連想」「話し合い」とおして学ぶ。

内容は、冒頭に「イマジン」の旋律の楽譜があり、続いて「イエスタデイ」の楽譜を見て鑑賞した後、声を出すための身体構造など、声楽についての説明がある。特徴的なのは、トップヴォーカリストとして例示されている歌手である。フランク・シナトラ、プレスリー、マイケル・ジャクソン、ブリトニー・スピアー

ズ、ジャスティン・ビーバーなど、13人中12人が大衆商業音楽ジャンルの歌手であり、それ以外はオペラ歌手のパパロッチの名があるのみで、インドネシア社会における西洋古典音楽の不在を象徴したリストとなっている。続いて器楽演奏の説明、西洋音楽の基本的リズムの説明がなされた後は、古代ギリシアから現代に至るまでの音楽史が、各時代の代表的作曲家とともに詳細に説明されている。課の最後にあるパフォーマンス評価は、この課で獲得した知識の発表と生徒グループによる西洋の歌の演奏の他者評価である。

第11学年2学期 第7課 「西洋楽器の演奏」

西洋楽器の演奏：楽器の種類（リズム楽器、旋律楽器、和楽器）

音楽ショー（アンサンブル、バンド）

身につけることは、「多様な種類の楽器がわかる」「分類に基づいて複数の楽器を演奏する」「アンサンブルでの楽器演奏で習熟度を発揮する」「西洋音楽演奏の準備をする」「バンド、アンサンブル、コーラスで西洋音楽の演奏を特徴づける」の5項目であり、これらを「観察」「問い」「連想」「創造的活動」「話し合い」とおして学ぶ。

内容は、初めに「イエスタデイ」の視聴、「Cinco Patitos」のリズム練習があり、続いてスロヴォダン・ペロヴィッチの「ピアノバラード第2番」ジョン・ペリーマンの「カントリーソング3」、「エーデルワイス」、「イエスタデイ」の楽譜が掲載されている。解説は、楽器とその演奏についての説明で、鍵盤楽器、打楽器、管楽器、弦楽器が紹介されている。課の最後に「イエスタデイ」を演奏しようとするが、全体としては演奏そのものの技術を身につけるのではなく、西洋楽器についての知識を学ぶことが主な内容の課となっている。

第11学年2学期 第8課 「西洋音楽について書く」

西洋音楽について書く：教育、歴史、ジャーナリズム、批評

身につけることは、「様々な音楽芸術レビューを説明する」「異なる目的のための音楽芸術レビューの系統がわかる」「レポート課題のために特定の基準を用いて西洋音楽芸術作品を分析する」「多様な目的のための音楽芸術についてのレポートを集める」の4項目で、これらを「観察」「問い」「連想」「創造的活動」「話し合い」とおして学ぶ。

この課の内容は、音楽についての文章を書くことが主であり、文章の種類を教育目的の記述、音楽の歴史の記述、音楽ジャーナリズムの記述、音楽批評の記述に分類して、実例をあげながら説明している。学びの手段としてあげられている「創造的活動」も、演奏や作曲ではなく、音楽について文章を書く活動を指す。

第12学年1学期 第3課 「創造的音楽のテクニック」

芸術と文化：創造的音楽の概念、創造的音楽の種類とテクニック、音楽創作の過程

創造的音楽芸術

音楽の意味、音楽の象徴、音楽の美的価値

身につけることは、大きく分けて「1. 音楽を正確に創作するための概念、テクニック、過程を理解する」と「2. 自分の選択に基づいて創造的な音楽を発表する」の2点あり、それぞれの中に、さらにa～eの5つの項目がある。1. の中の5項目は、a. 音楽創作の概念、テクニック、方法を理解し、b. それを記述し、c. 創造的音楽作品を分析し、d. その演奏を理解し、e. 自分自身の音楽創作に応用するとある。2. の中の5項目は、a. 音楽創作の概念、テクニック、過程を理解する、b. 音楽創作の過程を説明する、c. 創造的音楽作品を分析する、d. 創造的音楽演奏を理解する、e. 自分の音楽を作るために概念、テクニック、過程を応用する、の5つである。これらのうち、a、c、d、eはさらに2～3の小項目に分けられており、大項目から小項目まですべてを含めると、身につけることは16項目となる。

内容は、はじめに音楽芸術には創作と鑑賞があることなどを、かなりのページを割いて記述した後、ナショナルソングの「Ibu Pertiwi」を歌う活動があるが、この曲のメロディーはキリスト教の賛美歌であると思われる。この後、知っている歌を数字譜か五線譜に書いてみる活動があり、創造的音楽の種類として、伝統音楽、古典音楽、近代音楽、現代音楽が紹介されている。説明では、近代音楽は伝統音楽と古典音楽の延長上にあるが、現代音楽はリズムや調整、旋律、ハーモニーなどにしばられない音楽で、インドネシアではまだ新しい音楽であるとしている。地域の音楽の例として南カリマンタン地方の歌とマカッサル地方の歌が挙

げられている。創作の過程としては、インドネシア各地の音楽がもつ様々な機能が、技能、コミュニケーションの媒体、娯楽、表現などの6項目例示されている。この項の最後には西ジャワのスンダ文化の「Jemplang Bangkong」の数字譜を見て歌ってみる活動がある。このように、課の題目にもかかわらず、実際の作曲活動は含まれておらず、既存の曲の演奏にとどまっている。

第12学年1学期 第6課 「音楽芸術分析」

芸術と文化：音楽分析（音楽の意味、音楽記号、音楽の美的価値観）

身につけることは、1. 意味、象徴、美的価値観に基づいて音楽の芸術を理解し、分析する、2. 自身の選択に基づいて創造的音楽を発表する、の2つの大項目の下に、1. にはa～fの小項目、2にはa～iの小項目があげられている。1. の小項目はほとんどが説明、ことばの定義を調べる、音楽の記号や美的価値観が分かる、音楽の意味、象徴、美的価値を分析する、といったものであり、最後のfのみが音楽を創作する活動となっている。2. の小項目はc、f、iのみが実際の創作活動で、他は、分かる、分類する、比較する、例示する、討議する、資料を発表する、というように、音楽そのものを創作することについての項目ではない。

内容は、冒頭に芸術活動で期待される人格形成の価値観が9つ書かれているが、これらはほぼ道徳の内容である。「はじめに」ではグローバル化の中では創造的であることが重要であるとして、創造的に思考することに慣れることは自信につながるとしている。音楽分析の説明は大変抽象的で難解である。音楽記号の項では、五線譜の書き方、ペンタトニック音階の書き方、数字譜の書き方を、スンダニーズ、ジャワのカラウイタン、バリのカラウイタン（dingdong notation という記譜法で書かれる）を例として説明している。この説明ののちに、自分が創った旋律を調整記号かdingdong記譜法で書き表す活動があり、インドネシアの音楽の音階の例が表にまとめられている。リズムパターンの項では、アチェ州の「the Bungong Jeumpa」の歌を手拍子に合わせて歌う。旋律のパターンの項では、ジャワ地方のBaratに基づいて作られた歌「Sorban Palid」を歌う。音楽の美的価値観の項では、インドネシアには多様な種類の音楽芸術があり、それらは知識、宗教、社会、経済、芸術の価値観を反映していると説明したのち、「Main Music」という童謡を歌い、分析し、討議する。創作課題として、よく聞く歌を聴き、分析し、音楽を作り、先生やメディアの音楽演奏を分析し、社会で流行している音楽を分析する活動が挙げられている。北スラウェシの「0 Ina ni Keke」の楽譜を見て歌った後で、その歌の音楽的要素を表にまとめる課題もある。振り返りに書かれていることは、寛容、礼儀、母国愛など、ほぼ道徳教育の内容である。

第12学年2学期 第11課 「音楽を作る」

音楽的創造性：創造的アイデアの概念を実践する

音楽の創造：創造的音楽を発表する、創造的音楽を読む、創造的音楽を作る

創造的作曲

身につけることは、1. 音楽作りに技術的概念と過程を適用する、2. 創造的音楽作品の分析結果を発表する、3. 革新的な音楽演奏を見せる、4. 創造的音楽演奏について書いたり批評したりする、5. 種類に基づいて創造的音楽についてのレポートを書く、の5つの項目に分けられている。そのうち4番目の項目には次の方法を用いるとして、創造的音楽について説明したり、演奏したり、楽譜を読んだり、自分たちの歌の楽譜を発表したり、多くの創造的体験をとおして感受性を発達させたり、音楽を作ったり発表したりすることを通して芸術・美学の問題を解決する想像的アイデアを育てて創造的なアイデアを見つける能力を刺激する、の6点があげられている。また、5番目の項目はさらに（1）機能や種類に基づいて音楽作品を評価する（2）種類に基づいて創造的音楽作品がわかる（3）種類に基づいて創造的音楽を批評する（4）音楽批評を書く（5）知識、態度、芸術的スキルを、音楽作品を書くことと作曲された曲をとおして創造的音楽の分野と統合する、とある。これらのコンピテンシーを身につけることによって、生徒は芸術的活動の中に、好奇心、誠実さと自律、革新性と適応性、勤勉さと責任感などの9項目の人格面の価値を示すことが期待されている。

内容は、まず始めに創造性は科学にも通じるものであるとして、アインシュタインやカントに言及している。次に、「紙に書かれた音楽」という項で、ナショナルソングである「Tanahku Indah」とTapanuli地方の歌である「Sigulempong」の五線譜を読み、数字譜にしたのちにリズムパターンを変えてみる活動があり、

さらに「Pantun Nasihat」の楽譜を読んだのちに自分たちの地方の特徴のある作品を作って楽譜に表す作業をする。ギターの音楽の例としてポップスの「Sepanjang Jalan Kenangan」の数字譜が掲載されている。次の創造的音楽作品の項では、インドネシアでは様々な音楽が作られてきたことを述べ、作曲の方法が説明されたのちに作曲活動に入る。最後は「The Breeze」の五線譜を読み、創造的音楽とは何かを考え、さらに他の数曲の伴奏のアレンジをする。3つ目の項では創造的音楽作品とは何かを、作曲、即興、編曲の面から説明している。

第12学年2学期 第12課 「創造的音楽演奏」

創造的音楽演奏：音楽の発展、地域音楽の役割、音楽的体験

音楽を書く

音楽ショーのマネジメント：計画、準備、実施

身につけることは、1. 具体的、抽象的分野における芸術的音楽作品の演奏は、学校で独自に学んだこと、感謝をもって効果的かつ創造的に行動したことに関連しており、科学的原理に基づいた方法を用いることができる、2. 音楽作品を通して自己表現し、創造的音楽についてのレポートを書く、の2項目あり、それぞれが細分化されている。1. には、芸術文化教育における創造的音楽の役割がわかる、演奏の観察に基づいて音楽体験の価値を示せる、クラスで編曲された創造的音楽作品を表す、作品から創造的音楽のアイデアを発展させる、様々な新しい音楽体験を通して音楽をデザインする、異なる音楽創作体験を通して知覚の感度を設定する、の6点が含まれる。2. には種類に基づいて音楽作品を書く、機能と種類に基づいて音楽作品を評価する、自分が作った曲を演奏する、種類に基づいて音楽作品を批評する、の4点が含まれる。そして生徒は芸術活動の中に、11課にあげた9項目のうち「革新性と適応性」を除いた8項目の人格面の価値を示すことが期待されている。

内容としては、この課のコンピテンシーでは生徒が自分の作品を演奏できることを目指しているが、演奏そのものに直接関係のある内容は少ない。まず、音楽の発展を古代から現代まで順を追って説明し、東欧のナショナリズムから現代音楽が生まれたことを述べたのちに、地域の音楽の役割を述べ、インドネシアにおける伝統、近代、現代、地域、国際の様々な音楽の発展と、海外の伝統音楽の役割を説明している。音楽的体験の項では、アメリカのカントリー音楽とジャズの音楽的重要性を説明した後、これらを聴いて、自分で編曲し、演奏する活動がある。最後はクラスでの演奏会のためのマネジメントの手順や計画の立て方を学び、創造的な音楽を演奏する。

4. 文化のグローバル化と音楽教育

本節では、前節で概要をまとめた教科書の内容から、グローバル化への対応を見ていく。始めに、西洋音楽とインドネシアの伝統音楽、それらにのっとった現代音楽のバランスについてみると、カリキュラム上は1学年ごとに均等に時間配分がなされているが、実際の内容には大きな偏りがあることがわかる。最も顕著なのは、実際の鑑賞や演奏などの活動における西洋芸術音楽の不在である。第11学年の教科書の西洋音楽の内容は、ほとんどが西洋音楽史の知識を情報として学ぶためのものであり、バロックやロマン派などの時代の名称や説明、その時代の代表的な作曲家の名前、音楽理論などが詳しく文章で述べられている反面、楽曲を鑑賞したり演奏したりするような直接音楽にふれる活動はない。西洋音楽として歌や楽器演奏がなされるのは、ビートルズの「イエスタデイ」やジョン・レノンの「イマジン」、映画「サウンドオブミュージック」の挿入歌「エーデルワイス」やディズニーの「星に願いを」といった、大衆商業音楽ジャンルに分類される曲のみである。この大衆商業音楽重視の傾向は、先述の声楽家のリストにあげられた西洋の歌手13人のうち12人がこのジャンルの歌手であったことから明らかである。12学年2学期の最後で海外の伝統音楽の役割を説明しているが、ここでも実際に鑑賞や演奏の活動をするのはアメリカのカントリー音楽とジャズである。

これに対し、インドネシアの音楽に関しては、各地の伝統的な音楽や民謡についての知識に関する内容に加えて、それらを演奏する活動も西洋音楽の課よりも多く取り入れられている。前期中等教育の8年生の教科書でも伝統楽器と民謡の理解と演奏を学んだことを合わせて考えれば(福田・石井, 2023)、インドネシアの伝統音楽文化が強調されていることがわかる。また、インドネシア各地の伝統音楽の強調は、対西洋音

楽文化という意味だけではなく、西洋の影響を受けたインドネシアポップスへの対応という面もある。中等教育の生徒、大学生、そして音楽を専門とする教員養成大学の学生までが、インドネシアポップスを好む傾向がある中で（Gunara & Sutanto, 2021; 石井, 2023）、伝統的な音楽のもつ芸術的な価値や道徳観、宗教的意味合いを、音楽教育をとおして浸透させようという政府の意図が現れた内容となっている。

後期中等教育カリキュラムと教科書のもう一つの特徴としては、音楽に関わる職業教育の要素が随所に見られることがあげられる。その一つは音楽劇や音楽演奏の上演のマネジメントについての内容である。演奏や歌唱そのものについては前期中等教育で学んでいるのが前提であるため、後期中等教育ではあまり丁寧な記述はないが、音楽パフォーマンスの上演のマネジメントの過程については、一つ一つ段階を追って丁寧に説明があり、活動が指示されている。また、音楽に関する批評を書くという、ジャーナリストや評論家になるための訓練のような内容も含まれている。これらは、生徒個人の豊かな感性を育んだり、音楽を楽しむ、愛する心を育むことを目的とする日本のリベラルアーツ的な音楽教育とは異なる視点である。21世紀に入ってからシンガポールが音楽産業に経済成長の伸びしろを見出して、西洋の人気ポップ歌手やロックバンド、ミュージカルなどの興行をシンガポールに呼びこもうという政策に基づき、大衆商業音楽を学校教育に積極的に取り入れ始めたように、音楽教育を実利に結び付けた考え方である。文化のグローバル化現象として、西洋の影響を受けたポップスやロックの大衆商業音楽が世界中を席卷している中、インドネシアのように西洋から入ってきた音楽がもともと大衆商業音楽であった国では、音楽産業で職につくための職業教育と音楽教育は親和性があったといえる。しかし、マネジメントや批評のやり方を学ぶ内容は、伝統音楽を学ぶ課の中にもあり、地域に伝わる伝統的な音楽劇や音楽演奏のパフォーマンスを企画し、実施するに至るまでを扱っており、生徒の関心を伝統音楽にも広げようとしている。さらに、この協働作業における協力や責任感などの道徳的要素が強調されている点には、社会における道徳や価値観の学習という側面を見ることができる。

おわりに

西洋近代がアジアに入ってきた19世紀後半、日本は西洋諸国と互角の文明国家であるということを示すために、意図的に西洋の上層階級の音楽文化を近代国家日本の音楽文化として取り入れようとした。それは芸術音楽という取り入れた音楽ジャンルの選択にも現れていたし、リベラルアーツとしての教育という発想にも現れており、学校の音楽教育もこの政策に基づいたものであった。それに対して、インドネシアがナショナルカリキュラムで学校の音楽教育に国民形成の役割を担わせる政策を導入した2013年は、もはやヨーロッパ中心主義の時代でないばかりか、ヨーロッパにおいてさえも、音楽の多様性として学校の音楽教育に大衆商業音楽を取り入れるべきだという議論がある時代となっている。また、文化のグローバル化によって世界中に西洋発の大衆商業音楽文化が浸透し、韓国のように国を代表する産業となっているところもある。このような中、現在のインドネシアの教育政策には、西洋の芸術音楽に関しての歴史と理論を知識として学ぶことはあっても、かつての日本のように音楽そのものを自国民の音楽文化の一部に取り入れようという意図はない。インドネシアにとっては、近代化とともに入ってきた西洋大衆商業音楽とインドネシアの伝統的な音楽とがまざりあった現代の音楽文化が主流であり、西洋芸術音楽はオルタナティブな音楽なのである。この現状を事実として反映しながら、グローバル化の影響で西洋風のインドネシアポップスが優勢となりつつある若者の音楽文化に対して、宗教や地域の慣習や価値観を伴うインドネシア独自のローカルな伝統音楽の価値を示そうとしたのが、今回のナショナルカリキュラムの改訂であるといえよう。

付記

本稿は以下の文部科学省研究費補助金による研究の一環である。石井由理代表「アジアの芸術教育におけるグローバル化と国民文化形成」（2017 - 2023, 基盤研究 (C), 課題番号: 17K04793）、福田隆真代表「アジアのグローバル化と芸術教育による独自文化形成の調査研究」（2022-2025, 基盤研究 (C), 課題番号 22K02635）。

参考文献・URL

- Agus Budiman et al. (2018a): *Seni Budaya XII Semester 1*. Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan Republic Indonesia.
- Agus Budiman et al. (2018b): *Seni Budaya XII Semester 2*. Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan Republic Indonesia.
- 福田隆眞・石井由理 (2023) : 「インドネシアにおける芸術教育と文化形成について：前期中等教育を中心として」 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 第 55 号、77 - 86
- Giddens, A. (1990): *The consequences of modernity*. Cambridge: Polity Press.
- Gunara, S. & Sutanto, T. S. (2021): Enhancing the intercultural competence development of prospective music teacher education: A case study in Indonesia. *International Journal of Higher Education*, 10(3), 150-157. <https://doi.org/10.5430/ijhe.v10n3p150> (2023 年 10 月 22 日閲覧)
- 石井由理 (2017) : 「音楽文化を通して見たナショナル・アイデンティティ：シンガポールの事例」 山口大学教育学部研究論叢 66(3)、1-12
- 石井由理 (2023) : 「近代化と国民文化形成における音楽教育の役割」 山口大学教育学部研究論叢 72、95 - 105
- KI dan KD Seni Budaya SMA MA Kurikulum 2013 Tahun Pelajaran 2021/2022*
file:///D:/2023%2027%20SMA-MA-SMK-MAK-Seni-Budaya%20(1).pdf%20-.html (2023 年 10 月 21 日閲覧)
- Mack, D. (2007): Art (music) education in Indonesia: A great potential but a dilemmatic situation. *Educationist*, 1(2), 62-74.
- McGrow, A. C. (2013): *Radical traditions: Reimagining culture in Balinese contemporary music*. New York: Oxford University Press.
- Puad, L. M. A. Z., & Ashton, K. (2022): A critical analysis of Indonesia's 2013 national curriculum: Tensions between global and local concerns. *The Curriculum Journal*, 34, 521-535. <https://doi.org/10.1002/curj.194> (2023 年 10 月 22 日閲覧)
- Sem Cornelyos Bangun et al. (2018a): *Seni Budaya XI Semester 1*. Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan Republic Indonesia.
- Sem Cornelyos Bangun et al. (2018b): *Seni Budaya XI Semester 2*. Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan Republic Indonesia.
- Zakarias S. Soeteja et al. (2018a): *Seni Budaya X Semester 1*. Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan Republic Indonesia.
- Zakarias S. Soeteja et al. (2018b): *Seni Budaya X Semester 2*. Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan Republic Indonesia.